様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２９０２

研究課題名（和文）高大連携におけるコミュニケーション教育の研究

研究課題名（英文）The Study of Communication Skill Education

研究代表者
坂口　昌子（SAKAGUCHI, Masako）

京都外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：６０３４０４２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　研究期間全体を通じて，２つの課題に取り組んだ。1つは高等学校で実施可能なコミュニケーションに特化した授業の展開方法についてであり，もう1つは大学初年度の学生に対して行うコミュニケーション教育についてである。
　まず，高校でのコミュニケーション教育に関しては，評価に関連した内容をパネルディスカッションという形で学会発表をした。また，コミュニケーション力を高めるための授業を実際に高校生に対して行った。その成果は論文の形でまとめた。
　その一方，大学生の初年次教育に関しては，京都外国語大学1年生のクラスで，コミュニケーション力を高めるための授業を実施した。その成果を2本の論文にまとめた。

研究成果の概要（英文）：　We have treated two themes during our research project. The one is about the way of educational development specialized for the senior High School students and the other is about the communicational education for the first year student of the Kyoto University of Foreign Studies.In the former case, we had presented the results about evaluation in the form of panel discussion at the conference. And we taught lessons in order to augment communication skill actually and wrote one article. In the latter case, as a same way, we had lessons for communication skill and publish two.

研究分野：日本語教育

キーワード：コミュニケーション教育　高大連携　日本語教育　国語教育

１．研究開始当初の背景

近年，世間一般でコミュニケーション力が問われるようになったが，本来その役割を担うはずの国語教育は，受験に必要とされる項目や文学教育に重きをおくことから，「語学」教育としては軽視されている。他方，日本語教育では，これまで外国語を母語とする成人に「日本語」の「語学」教育を主に展開してきたが，母語話者で未成年者に対する教育にも関心を持つようになってきている。

日本語教育では「プロフィシェンシー(熟達度言語能力）」に着目した研究成果は数多く，その評価法も多数の先行研究がある。中でも，OPI（Oral Proficiency Interview Test）と呼ばれる評価法は，口頭能力について判断するもので，テキストの型，場面，正確さ，などを複合的に判断し，学習者の口頭能力を初級下から超級までの 10 段階に位置づけて判定することができる。これらの研究成果から作成された，日本語母語話者向けの教材・研究も存在する。日本語教育分野から提示された母語話者向けの実践的なテキストとして，書き言葉に関しては，浜田他（1997）や大島（2005）などがあり，話し言葉に関しては，野田・森口（2003）などがあるが，両者とも大学生向けに書かれ，中学・高校の国語教育現場では，現在はまだ使われてはいない。また，マーケティングや行動学の視点から書かれた母語話者向けのテキストとして，武田・藤木編（2006）などがあり，言語技術という視点からでは，三森（2005）などがある。両者ともに四技能を研くことだけにとどまるのではなく，論理的思考力・問題解決力自体を育てることを目的とするテキストである。このように国語教育に応用できる評価法や教材は既に，ある程度存在する。ただ，カリキュラムが固定化されている学校教育の現場の中で，それをどのように応用し具現化していくか，また，未成年者にどのように応用するかという点が大きな課題であり，教育現場に携わっている教員とともに考えていくことでその解決を図っていきたいと考えた。

２．研究の目的

本研究は，中学校，高等学校の国語教育での，コミュニケーションの基礎をなす言語能力（特に「話す」「聞く」）に関して，評価法並びに教材コンテンツの開発，指導法の開発を目的とするものである。
本研究では，日本語教育学において培われてきた成果に基づくスキルやメソッド等を応用し，また，他分野からの知見も生かしつつ，反転授業のスキルなど，最新の機材を使う e-learning の方法を開発し，より実効性の高い，生徒一人一人の状況にあったプログラムを構築することを目的とする。

またそれと同時に，大学に入学してきたばかりの大学初年度の学生に対しても，同様にコミュニケーションの基礎をなす言語能力を育成するための教材開発を目的とする。

３．研究の方法

実際に高等学校で研究授業を行いつつ，そのフィードバックを繰り返して，現場を知る教員と大学の研究者，また，授業に参加する生徒たちの反応から教材を作り上げていく。

まず，国語教育と日本語教育分野の認識の共有をはかりつつ、高校国語の教科書から、口頭表現教材に使えそうなものをピックアップし、試案教材を開発する。

次に高校での研究授業を実施し，その結果を反映させたコミュニケーション用教材を提案する。

国語教員として，日々高等学校の教育現場で授業をされている高校教諭を研究協力

者とし，教科書の内容をどのようにコミュニケーション教材に生かしているかについて情報共有をした。

次いで，日本語教育関係の教員が日本語教育のピアラーニングなどのスキルを使って高等学校の国語の教科書教材をコミュニケーション用に作りなおし提案した。

これらの知見を活かし，2017 年 7 月に高校生約 30 人に対して，コミュニケーションのための国語教育に関する研究授業を実施した。

グループ活動中の談話や，事後アンケートなどを通して分析したところである。

また，高校生に対するコミュニケーション教育とは別に，大学初年度の学生に対しても同様のコミュニケーション教育を行い，その授業成果についても報告した。

４．研究成果

研究期間全体を通じて，２つの課題に取り組んだ。1 つは高等学校で実施可能なコミュニケーションに特化した授業の展開方法についてであり，もう 1 つは大学初年度の学生に対して行うコミュニケーション教育についてである。 まず，高校でのコミュニケーション教育に関しては，年に 2，3 回の研究会を行い，高等学校と大学の教員がそれぞれの立場で教育成果や研究成果を持ち寄って 話し合った。主な内容としては，高等学校の国語教育の現状や，実施可能なコミュニケーション教育の方法についてであった。 最終年度には，「言語教育とアセスメント」というタイトルで，評価に関連した内容をパネルディスカッションという形で代表者と分担者 1 名が学会発表をした。コミュニケーション教育を授業に取り入れた場合，その評価をどうしていくのかという話題にも触れられた。 また，代表者と分担者 1 名が「やさしい日本語」の概念を使い，身近な日本文化を外国人日本語学習者に伝えるタスクを課したコミュニケーション力を高めるための授業を高校生に対して行った。その成果は論文の形でまとめられた。 その一方，大学生の初年次教育に関しては，京都外国語大学 1 年生のクラスで，コミュニケーション力を高めるための授業を実施した。その成果を代表者が 2 本の論文にまとめ，発表した。さらに，スカイプを使ったコミュニケーション教育の成果を，研究分担者と海外の研究者が一緒になって発表している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文　査読あり〕（計　３件）

１．中西久実子（2017）「とりたてによる強調・パラフレイズでわかりやすくなるプレゼンテーションの手法 －辛坊 治郎氏のニュース解説の分析から－」『国際言語文化』3 号
pp．31-43

２．坂口昌子・村山弘太郎（2017）「日本語コミュニケーション力を高める授業実践－日本人高校生と外国人日本語学習者の協働学習から－」『研究論叢』pp．153-164

３．巻下由紀子，梅本貴豊，村上正行，古川浩一，山﨑その，村岡孝之，　西村政洋，早瀬明，　下村秀則，石川保茂（2016）「外国語学習における反転学習型アクティブラーニングの実 践と評価」『日本教育工学会研究報告集 JSET』pp.89-96

〔雑誌論文　査読なし〕（計　３件）

１．佐々木伸一（2017）「文化人類学における文化的ビジネス・スキル開発のための調査研究」『無差』24 号 pp.41-68

２．坂口昌子(2017)「アカデミックライティングで観察される学習者の引用技術について－学術場面で必要とされる引用と一般社会で見られる引用－」『日本語教育連絡会議（2017）論文集』30　日本語教育連絡会議事務局 pp.76-86

３．坂口昌子（2016）「大学初年度学生のパラグラフライティング－図形を言葉で表すために－」『日本語教育連絡会議（2016）論文集』28　日本語教育連絡会議事務局 pp.121-131

〔学会発表〕（計 10 件）
１．坂口昌子・森篤嗣・井上 志音・小林 正（2017）「言語教育とアセスメント」国際言語文化学会 第 5 回大会　京都外国語大学（京都市　京都府）

２．坂口昌子（2017）「キュレートで引用力・文章力をきたえる」第 30 回 日本語教育連絡会議 （国際学会）フォルクスホッホシューレ（オルデンブルグ（ドイツ））

３．中西久実子・Emi Murata margetic(2017)「Skype の対話による親和性と欧州における日本語学習・日本語教育のモチベーション向上」The 20th Japanese Language Education Symposium in Europe (AJE), Section 10 of the 15th EAJS International Conference, organised with EAJS (European Association of Japanese Studies)（国際学会）リスボン新大学　（リスボン市（ポルトガル））

４．由井紀久子，坂口昌子（2017）「ワークショップ４ 日本語能力の評価と生、生、生」JALP 日本語プロフィシェンシー研究会 2016 年度第 3 回例会　里山の休日京都・烟河　（京都府　亀岡市）

５．由井 紀久子（2016）「日本語プロフィシェンシー向上を目指したライティング教育」立命館大学日本語教育ＦＤ研修会（招待講演）立命館大学（京都府 京都市）

６．坂口昌子（2016）「キュレート作業は，学習者の引用への意識変化を引き起こせるのか―中国人日本語学習者 の引用について―」韓国日本語学会第 34 回国際学術発表大会 （国際学会）東國大学校　（ソウル市（韓国）

７．坂口 昌子（2015）「図形を言葉で表せるか―大学初年度学生の日本語力―」第 28 回日本語教育連絡会議 （国際学会）ザグレブ大学哲学部（ザグレブ（クロアチア））

８．村上正行（2015）「大学授業でのソーシャルメディア活用における役割の変化」システム情報学会第 40 回全国大会徳島大学（徳島県　徳島市）

９．由井 紀久子（2015）「プロフィシェンシーを高める日本語教育教材の開発」ブカレスト大学日本語教育ワークショップ（招待講演）ブカレスト大学 （ブカレスト（ルーマニア））

10．由井　紀久子（2015）「Rubric Assessments for Intercultural E-mail Communication in Japanese」5th International Conference on Foreign Language（国際学会）International Burch University（サラエボ（ボスニアヘルツェゴビナ）

〔図書〕（計２件）
１．由井 紀久子(2016)『談話とプロフィシェンシー』凡人社

２．村上正行　C.M.ライゲルース，A.A.カー=シェルマン 著、鈴木克明・林雄介 監訳(9 章・11 章担当)（2015）『インストラクショナルデザインの理論とモデル: 共通知識基盤の構築に向けて』北大路書房

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）
○取得状況（計　０件）

〔その他〕
ホームページ等
坂口昌子　右京ファンクラブネット右京まちづくりカレッジ【第 7 回：やさしい日本語とコミュニケーション　～外国人にもわかりやすい日本語表現～】
https://ukyofan.com/event/419/

６．研究組織
(1)研究代表者
坂口　昌子（SAKAGUCHI, Masako）
京都外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：60340428

(2)研究分担者
宇城　由文（USHIRO, Yoshifumi）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号： 20281496

佐々木 伸一（SASAKI, Shinichi）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号： 30175377

中川　良雄（NAKAGAWA, Yoshio）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号： 30251043

中西　久実子（NAKANISHI, Kumiko）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：30296769

長濱　拓磨（NAGAHAMA, Takuma）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：10367930

村上正行（MURAKAMI, Masayuki）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号： 30351258

村山　弘太郎　（MURAYAMA, Kotaro）
京都外国語大学・外国語学部・講師
研究者番号： 10760308

由井　紀久子（YUI, Kikuko）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号： 20252554

森　篤嗣（MORI, Atsushi）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号： 30407209

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
岩瀬　薫(IWASE, Kaoru)

井上 志音（INOUE, Shion）

金子　杏映(KANEKO Anna)

光村　直樹(KOMURA, Naoki)

阪谷　昭弘(SAKATANI, Akihiro)

西村　将太（NISHIMURA,　Shota）

松井　元（MATSUI, Gen）

脇阪　進三(WAKISAKA, Shinzo)